

経営概要 (H29年: 2,152a)

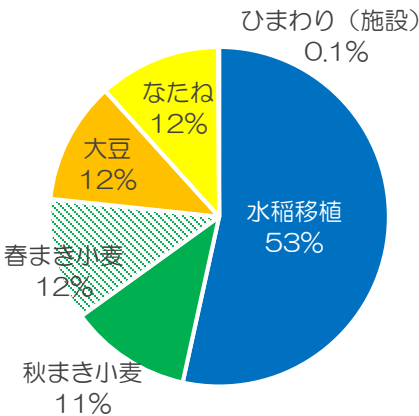


図36 作付割合

作物	面積
水稲移植	1,150a
秋まき小麦	250a
春まき小麦	250a
大豆	250a
なたね	250a
ひまわり (施設)	1,800㎡

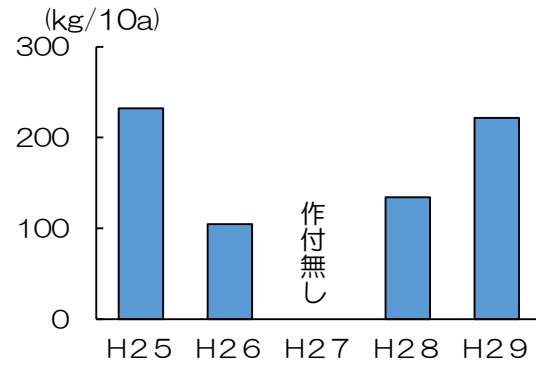


図37 JAいわみざわ平均との反収差(きたほなみ)

労働力

経営主 妻 父 母 臨時雇用のべ250人

作業の委託・受託内容

委託 収穫・乾燥・調製(なたね)
防除(水稲移植・小麦・大豆)

労働時間の試算

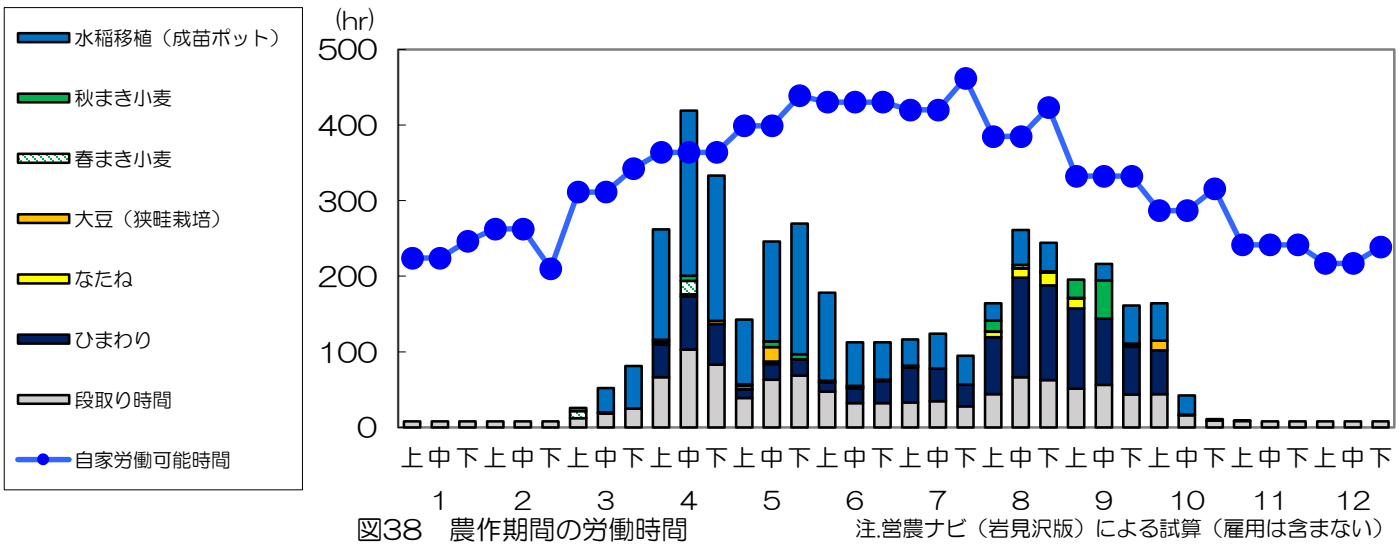
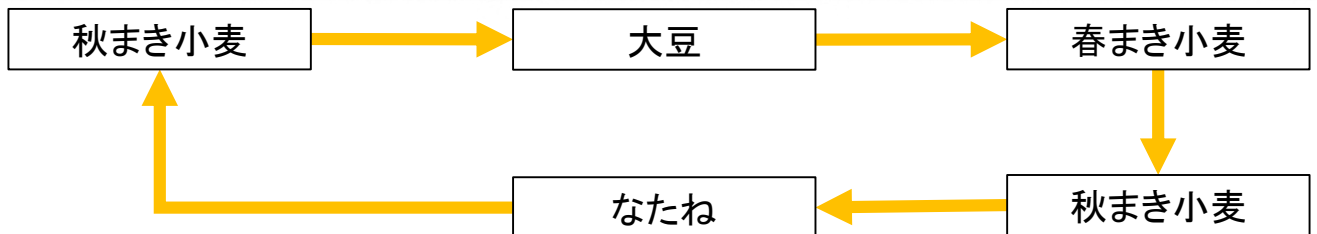


図38 農作期間の労働時間 注.営農ナビ(岩見沢版)による試算(雇用は含まない)

現在の輪作体系



輪作の考え方

- ◆ 水稲移植のほ場は固定し、畑作物は連作しないことを第一に考えている。
- ◆ 作土層に前作残さを残すことで肥よくな土づくりを目指している。
- ◆ キタノカオリは、赤さび病対策としてなたねの後作に作付けしている。

輪作をはじめたきっかけ

- ◆ 「きたほなみ1tどりプロジェクト」に参加して、連作は良くないと考えようになった。
- ◆ 小麦の収量は多くても800kg/10a止まりだったが、もっととりたいと思った。

なたねは近隣の先輩や仲間と情報交換をしながら技術力を磨いたよ！



輪作を行っての感想・実感

< 実感した効果 >

- ◆ 悪い年がなくなり、安定して高収量をとれるようになった。
- ◆ イネ科以外の作物を導入したためスズメノカタビラは減ってきた。
- ◆ 小麦の小麦立枯病が減少し、最近は発病していない。
- ◆ なたねの後作は土が白っぽくホコホコになり良くなっている（いつもは粘土でガラガラ）。
- ◆ 近年降水量が多いため排水性の変化は実感ないが、適期作業はできているので排水性が良くなっているということなのかもしれない。
- ◆ 作業が一時期に集中せず分散できている。



< 輪作してみたの注意点 >

- ◆ なたねの野良生えは、秋まき小麦除草剤の秋処理(エコパートフロアブル)をすることで問題ないが、ナタネタバコ等、新しい雑草が増加してきている。
- ◆ 作業分散はしたが、作物が増えたので一年通して忙しくなった。
- ◆ なたねは当初、収穫・乾燥は自分で行っていたが、他作物との競合があったため、作業委託することで作業競合を回避できた。
- ◆ 新たな作物の栽培情報が少なかったが、関係機関の支援や地域の仲間と悩みを共有して取り組むことができた。

今後の経営ビジョン

- ◆ 法人化や共同利用は今後考えていかなければならないと思っている。
- ◆ 直播たまねぎを導入したい。

経営概要 (H29年: 1,794a)

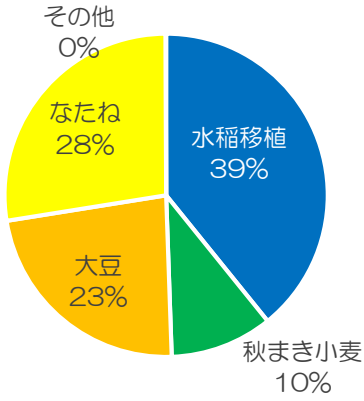


図39 作付割合

作物	面積
水稲移植	703a
秋まき小麦(大豆間作)	184a
大豆	413a
なたね	493a
スイートコーン	16a
子実用とうもろこし	0.8a

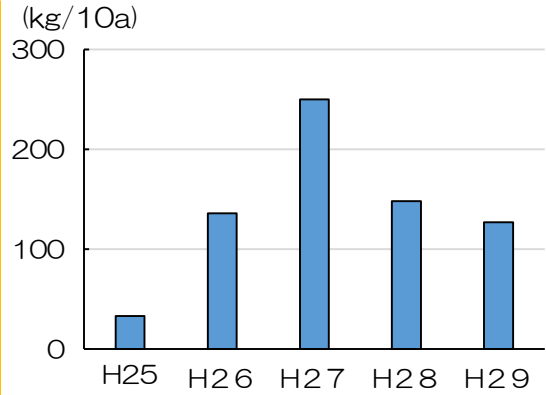


図40 JAびばい平均との反収差 (きたほなみ)

労働力	作業の委託・受託内容
経営主	受託 は種・収穫(なたね)
妻	委託 収穫・乾燥・調製(小麦・大豆・子実用とうもろこし)※共同施設利用含む

労働時間の試算

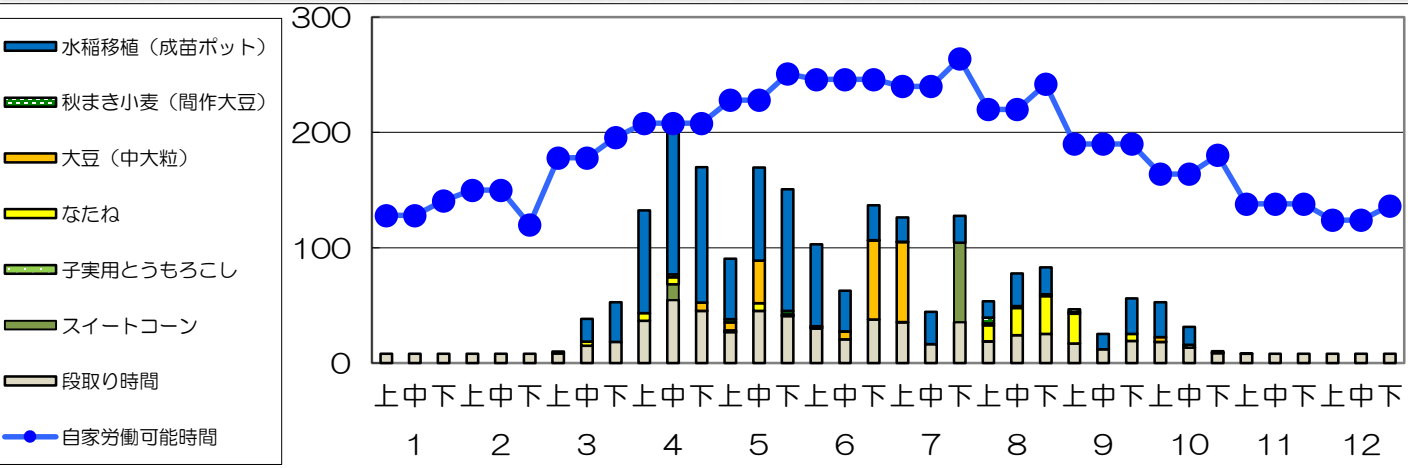
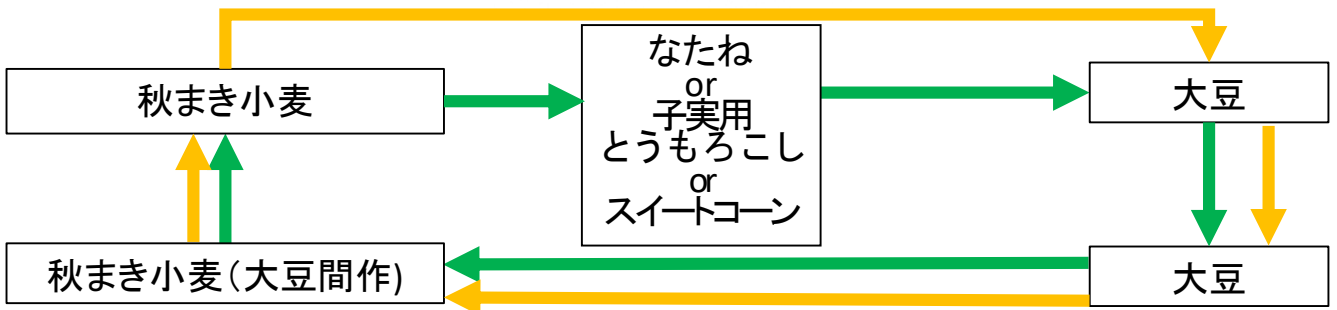


図41 農作期間の労働時間 注: 営農ナビ (岩見沢版) による試算 (雇用は含まない)

現在の輪作体系



輪作の考え方

- ◆ 水稲のほ場は固定し、畑作物で輪作する。
- ◆ 理想は小麦、大豆、なたねで3等分したいが、実際は大豆の面積が多くなっている。
- ◆ 秋まき小麦の後作緑肥はえん麦野生種を導入している（大豆の前作）。



輪作をはじめたきっかけ



- ◆ 小麦の収量が減っていると感じたことがきっかけで大豆を導入した。その後、地域の仲間から誘われて平成10年頃から大豆間作麦、平成25年から子実用とうもろこし、平成27年からはなたねを導入した輪作を行っている。

新規作物を導入できた一番の要因は、新規機械を共同で購入して、地域の仲間と一緒に始めることができたからかな。



輪作を行っての感想・実感

< 実感した効果 >

- ◆ 大豆の導入によりスズメノカタビラが減っている。
- ◆ 子実用とうもろこし作付け後は排水が良くなり、停滞水がなくなった。
- ◆ なたね作付け後は土壌が軽くなり、こなれやすくなった。
- ◆ なたね、子実用とうもろこし後の大豆は収量が上がる。
- ◆ 大豆間作麦はここ5年は10俵を切ったことはない。

< 輪作してみた際の注意点 >

- ◆ 排水対策をしっかりと行う。
例) 額縁明きょ施工、春・秋に最低でも1回ずつサブソイラを施工する。
- ◆ なたね作付け後は野良生え対策をしっかりとる。
例) 収穫後耕起せず「なたね」を出芽⇒盆前にロータリ⇒もう一度出芽⇒プラウ
※ただし、条件が悪くほ場に入りにくい場合は、除草剤散布で対応。
- ◆ 子実用とうもろこしは残さ物を春にすき込むと窒素飢餓になる可能性がある。

今後の経営ビジョン

現状の面積で色々な作物に挑戦し、地域の仲間と共に輪作を行っていきたい。

経営概要(平成29年:1,809a)

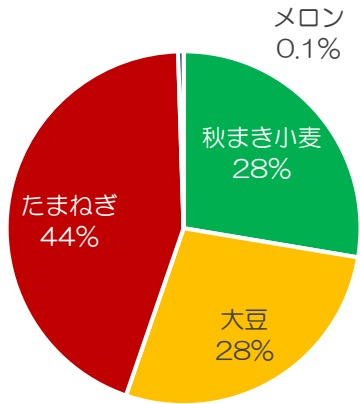


図42 作付割合

作物	面積
たまねぎ	800a
秋まき小麦	500a
大豆	500a
メロン	9a

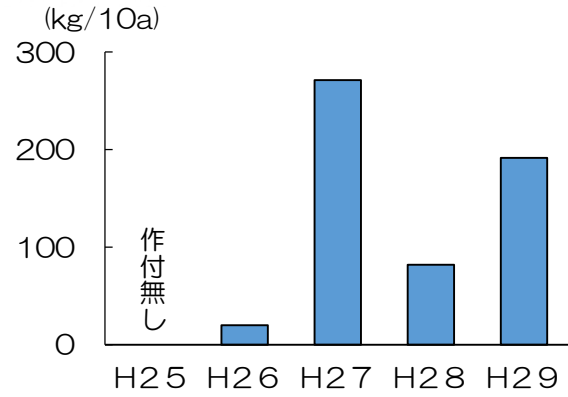


図43 JAいわみざわ平均との反収差(きたほなみ)

労働力

経営主 息子 臨時雇用のべ30人

作業の委託・受託内容

委託 収穫・乾燥・調製(小麦・大豆)

労働時間の試算

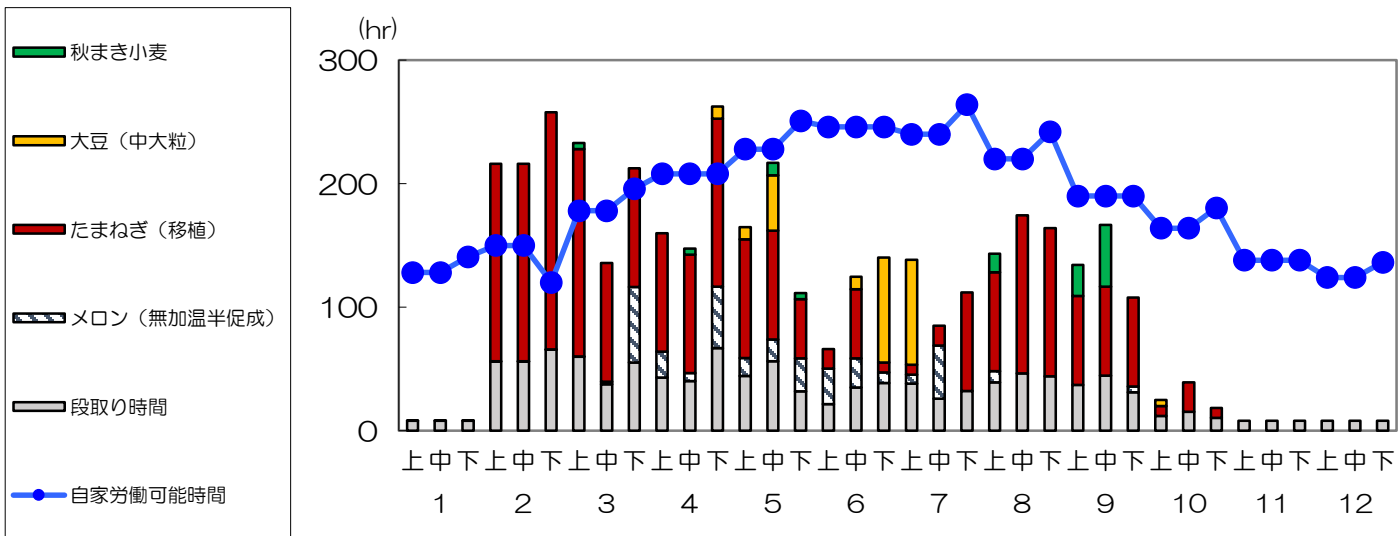
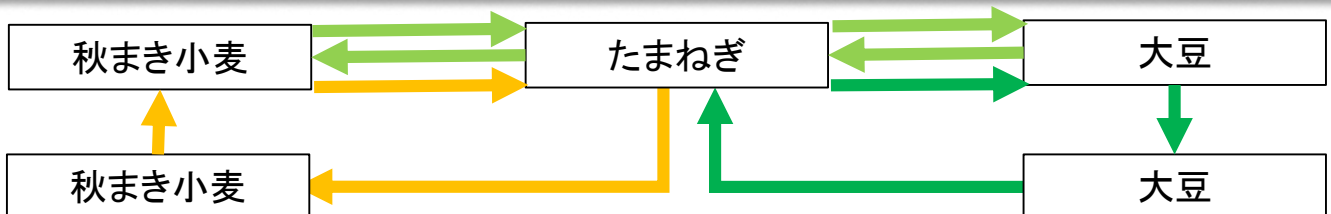


図44 農作期間の労働時間

注.営農ナビ(岩見沢版)による試算(雇用は含まない)

現在の輪作体系



※緑肥は、たまねぎ後作で、次作がたまねぎ・大豆の時に導入

輪作の考え方

- ◆ たまねぎを主軸に置いて経営している。
- ◆ たまねぎは、現在の労働力で800aが限界なので、その他の面積で小麦、大豆を作付けしている
- ◆ 輪作を始めたばかりだが、将来的にはたまねぎの間に2作別の作物（大豆や小麦）をはさめるようにしていきたい。
- ◆ たまねぎ後作として緑肥（えん麦野生種）を導入している。



輪作をはじめたきっかけ



- ◆ たまねぎと小麦はそれぞれほ場を固定して栽培していたが、多雨によりたまねぎの収量が低下したことで排水性改善を狙って小麦との交互作を開始した。
- ◆ 小麦導入後のたまねぎが思ったより取れなかったため、さらなるたまねぎの増収を目指して大豆を導入した。

輪作を行っての感想・実感

< 実感した効果 >

- ◆ 大豆後のたまねぎは増収した。
- ◆ 大豆後のほ場の土はふかふかで、適度に保水性が良くなっていた。
- ◆ たまねぎの乾腐病が減り、選果作業が楽になった。

< 輪作してみたの注意点 >

- ◆ 雑草（小麦後はイネ科雑草）が増えたように感じる。
- ◆ 大豆の残さがたまねぎ移植時に邪魔をすることがあるため、大豆収穫後にロータリーをかけておき、次年度のたまねぎ定植時に残さが邪魔しないようにしている。
- ◆ たまねぎ栽培に向いていない畑もあるので気をつけている。

暗きよ等の排水対策により雨害や湿害回避することが、輪作には必須技術！

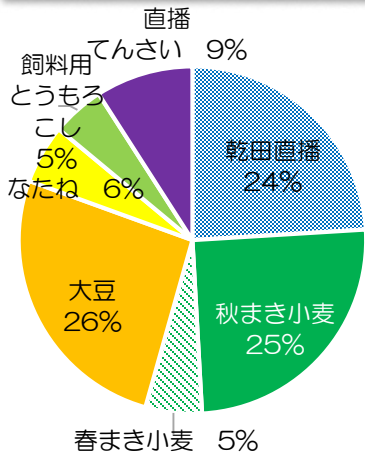


今後の経営ビジョン

- ◆ ヘアリーベッチとえん麦の混播等の緑肥の導入
- ◆ 今後、面積が増加した場合に備え、新たな作物の導入も考えていきたい。



経営概要 (H29年: 3,787a)



作物	面積
乾田直播	910a
秋まき小麦	169a
秋まき小麦(大豆間作)	781a
春まき小麦	199a
大豆	991a
直播てんさい	344a
なたね	208a
飼料用とうもろこし ※子実用とうもろこし含む	185a

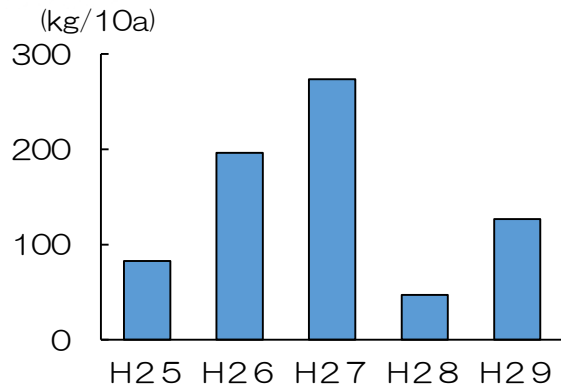


図46 JAいわみざわ平均との反収差(きたほなみ)

労働力

経営主 妻 父

作業の委託・受託内容

委託
 は種(乾田直播)
 収穫(乾田直播・小麦・大豆・直播てんさい・なたね・飼料用とうもろこし・子実用とうもろこし)
 乾燥(大豆・なたね・子実用とうもろこし)

労働時間の試算

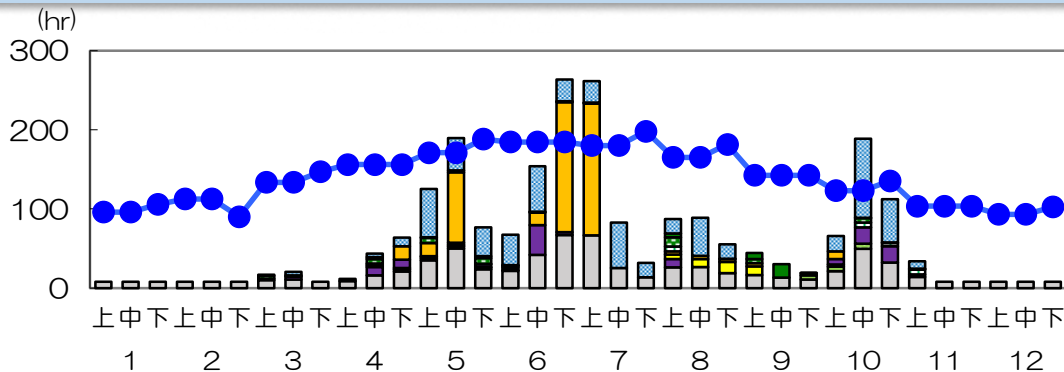
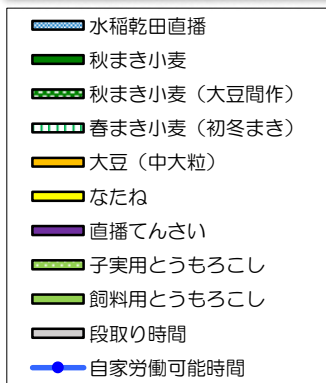
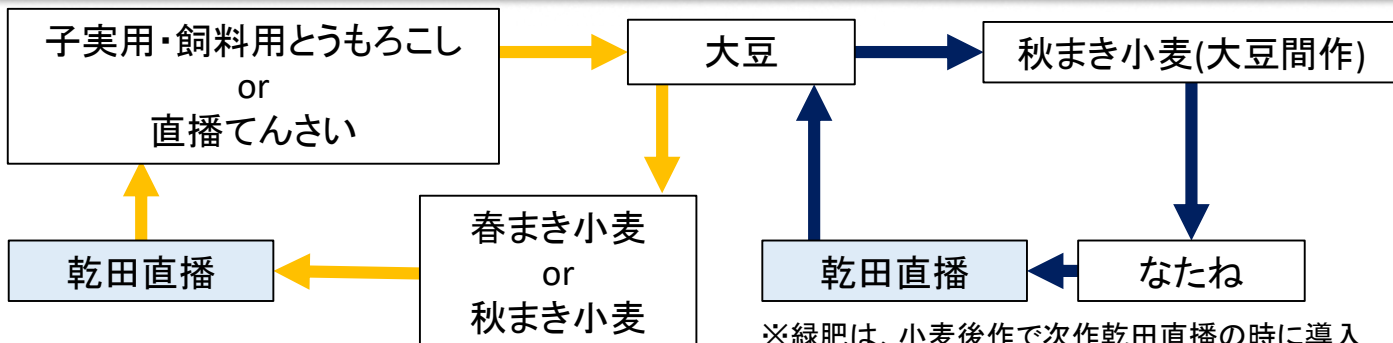


図47 農作期間の労働時間 注:営農ナビ(岩見沢版)による試算(雇用は含まない)

現在の輪作体系



※緑肥は、小麦後作で次作乾田直播の時に導入
 ※たい肥は、秋まき小麦後で次作なたねの時に導入

輪作の考え方

- ◆ 経営面積を4分割し、水稻、小麦、大豆、その他（なたね、飼料用とうもろこし、直播てんさい）で回すようにしている。
- ◆ 4年4作を目標としている。
- ◆ 秋まき小麦が2年続くこともあるが、その次は水田にするように心がけている。
- ◆ 小麦後作緑肥には緑肥えん麦とヘアリーベッチを導入している。
- ◆ 小麦収穫後のなたねは、は種前に牛ふんたい肥を施用している。
- ◆ 作物数が多いと機械費がかさむので、汎用性の高い機械を導入する。
- ◆ 個人で機械を持ちきれない時代ではないので仲間を募る。



輪作をはじめたきっかけ



- ◆ 輪作するまでは、排水の良いほ場は畑作物、悪いほ場は水稻を作付けしていた。結果、小麦の小麦立枯病やダイズシストセンチュウが発生し、収量が低下したため輪作を始めた。

輪作を行っての感想・実感

< 実感した効果 >

- ◆ 水稻の収量は確実に上がっている。
- ◆ 小麦の収量は安定している。
- ◆ 平成10年から大豆との交互作、平成15年から乾田直播に挑戦し、平成20年くらいから秋まき小麦の小麦立枯病が無くなった。
- ◆ 復元田で乾田直播栽培する際には、基肥なしで栽培している。
- ◆ 基盤整備によって排水性が向上した。



作物数が多いと機械費がかさむので、汎用性の高い機械を導入すること。暗きよ等の排水対策を入念に行う必要があるよ。

< 輪作してみたの注意点 >

- ◆ 排水が悪く湿気ったところでは、大豆の茎疫病が発生する。
- ◆ 機械の大型化によりほ場が硬くなっていると感じる。



水稻をすべて乾田直播にしたので、収穫作業（小麦・なたね除く）が10月に集中したが、共同作業で乗り越えることが出来たよ。

今後の経営ビジョン

露地野菜は労働力の面から難しいが、4月と9月の農閑期を利用して、新規作物の導入等を考えていきたい。

経営概要(H29年:4,181a)

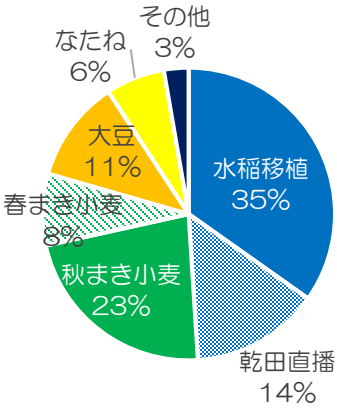


図48 作付割合

作物	面積
水稲移植	1,455a
乾田直播	593a
秋まき小麦	572a
秋まき小麦(大豆間作)	371a
春まき小麦	331a
大豆	473a
なたね	272a
緑肥	114a

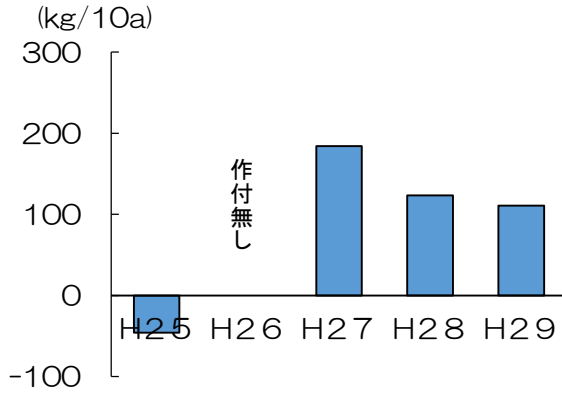


図49 JAいわみざわ平均との反収差(きたほなみ)

労働力

経営主 妻 息子

臨時雇用のべ30人(田植え)

作業の委託・受託内容

委託

収穫・乾燥・調製
(水稲・小麦・大豆・なたね)

労働時間の試算

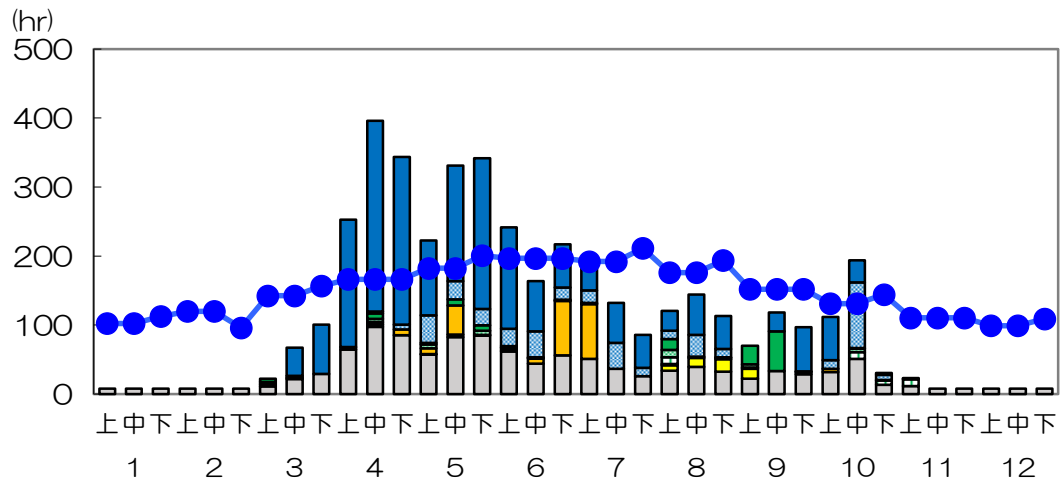
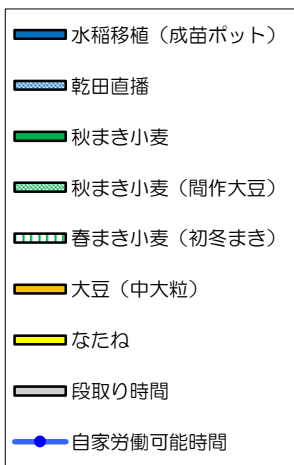
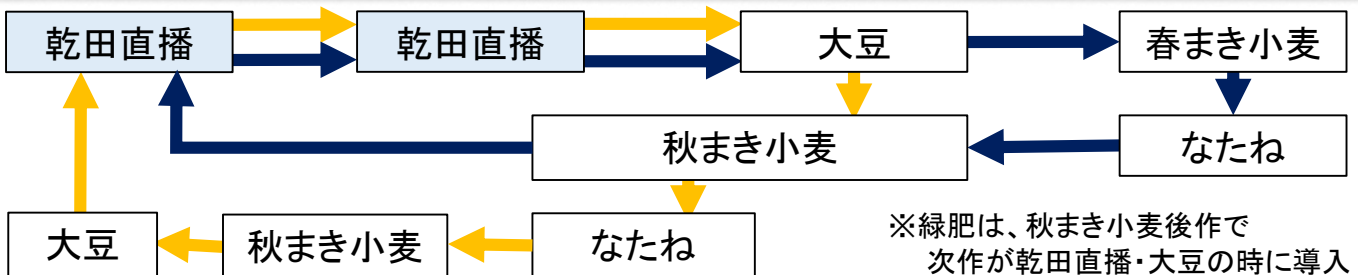


図50 農作期間の労働時間

注.営農ナビ(岩見沢版)による試算(雇用は含まない)

現在の輪作体系



※緑肥は、秋まき小麦後作で次作が乾田直播・大豆の時に導入

輪作の考え方

- ◆ 水稲移植は、ほ場を固定している。
- ◆ 乾田直播で田畑輪換を実施している。
- ◆ 秋まき小麦：大豆：春まき小麦もしくはなたねの作付割合を1:1:1にしたい。
- ◆ 秋まき小麦後作緑肥は次作が乾田直播、大豆の時にえん麦野生種を導入。
- ◆ 田畑輪換による雑草や病気の対策に期待している。



輪作をはじめたきっかけ



- ◆ 約8年前に小麦縞萎縮病が発生したことがきっかけで、乾田直播を導入した。
- ◆ 作物の収量が平均なのが不満で、さらなる増収を狙うために始めた。

汎用性があるは種機を導入した！

新規作物導入時に技術不安はあったが、関係機関のサポートやすでに導入している農家の事例を参考にして技術を磨いた！



輪作を行っての感想・実感

< 実感した効果 >

- ◆ 収量は全体的に向上している。
- ◆ 雑草は総体的に密度が低下していると感じている。
- ◆ セミクローラーでなければ入れなかったほ場に、ホイールで入れるようになったため、排水性は良くなった。
- ◆ 小麦は、眼紋病の発生が減少した。
- ◆ 復元田1年目の乾田直播は、基肥を鶏ふんのみに減肥できる。
- ◆ 小麦や大豆になたねが入ることにより、作業が分散されるようになった。

< 輪作してみたの注意点 >

- ◆ 乾田直播を導入後2年間は技術が確立していなかったため低収量が続いた。
- ◆ 大型機械（ケンブリッジローラー、トラクタ等）の踏圧の影響で枕が硬くなっているように感じる。
- ◆ 小麦は倒伏軽減剤や殺菌剤の回数が増えているので農薬費は減っていない。
- ◆ 小麦2年目でも小麦立枯病が発生した。
- ◆ 乾田直播と水稲移植では、栽培体系が違いため作業分散はできたが、総労働時間が増えたように感じる。

今後の経営ビジョン

- ◆ 新規品目としててんさいの導入を検討したい！！
- ◆ 仲間を増やして、さらなる増収を目指していきたい！

経営概要 (H29年:2,923a)

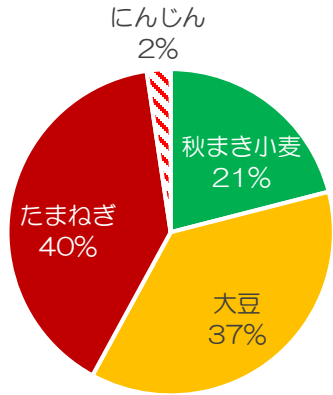


図51 作付割合

作物	面積
たまねぎ	1,160a
秋まき小麦	614a
大豆	1,080a
にんじん	69a

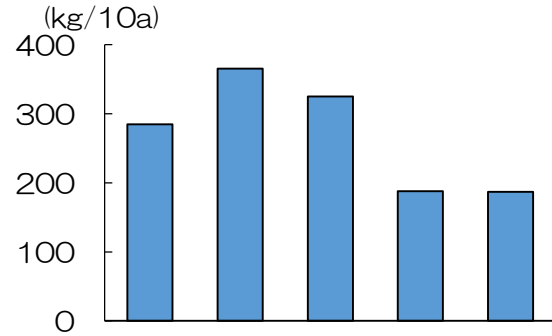


図52 JAいわみざわ平均との反収差(きたほなみ)

労働力

経営主 妻 息子 息子の妻

臨時雇用 たまねぎのべ20人、にんじんのべ2人

作業の委託・受託内容

委託 収穫・乾燥(小麦・大豆)
収穫・機械レンタル(にんじん)

労働時間の試算

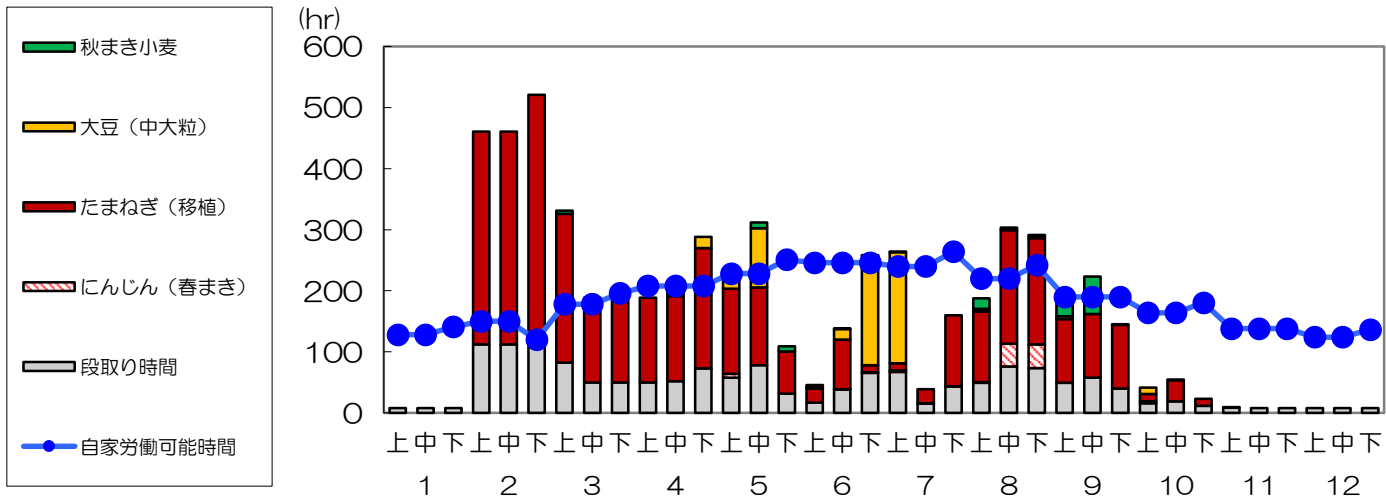
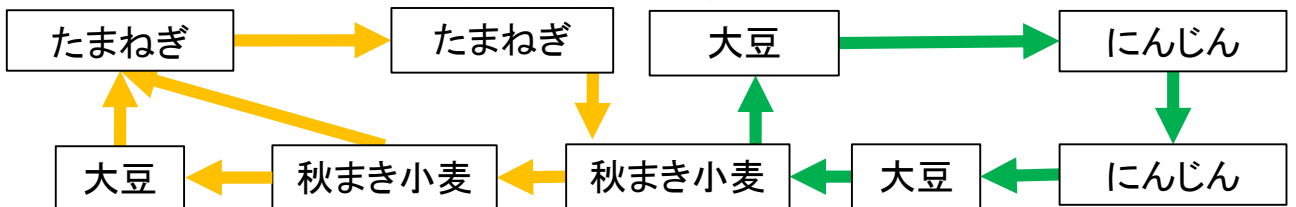


図53 農作期間の労働時間

注.営農ナビ(岩見沢版)による試算(雇用は含まない)

現在の輪作体系



※緑肥は秋まき小麦後作で次作大豆・たまねぎ、たまねぎ後作で次作たまねぎの時に導入

輪作の考え方

- ◆ 作付面積割合は、たまねぎ：大豆：秋まき小麦＝1：1：1になるように輪作したい。
- ◆ 後作緑肥でチャガラシやえん麦とヘアリーベッチの混播等を導入している。



輪作をはじめたきっかけ



- ◆ たまねぎを30～40年連作してきたことで、ほ場の排水性が悪くなっていたところ、近隣農家の助言を受けて秋まき小麦を導入した。
- ◆ 平成26年に6戸で小麦のは種機とケンブリッジローラーの利用組合を設立し導入した。
- ◆ 除草剤によって、雑草対策ができるという考えで大豆も導入した。

輪作を行っての感想・実感

< 実感した効果 >

- ◆ 小麦収穫後は、心土破碎等、ほ場改良に時間をかけられる。
- ◆ 透排水性が改善され、たまねぎの根張りが良くなり水やけもしなくなった。
- ◆ 小麦後のたまねぎは、乾腐病が減少し、肌がきれいになり製品率が上がった。
- ◆ たまねぎ後作の小麦や大豆は基肥を減らすことができる。
- ◆ 労働時間は、たまねぎだけの時は余裕があった。
今は、作物数が増え、適度に忙しいが、ちょうど良いと感じている。

たまねぎの間に違う作物を挟むとたまねぎの収量・品質は向上した。
輪作することで除草剤の選択肢が増え、雑草を抑えられているよ。



< 輪作してみたの注意点 >

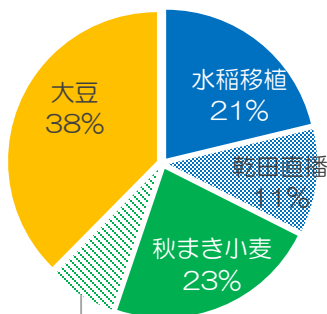
- ◆ 小麦の色が抜け始める時期から収穫前後にかけてアザミウマ類がたまねぎに移動する感じがするので、防除をしっかり行っている。
- ◆ 極早生たまねぎがあるので春まき小麦を辞めて作業競合を回避している。
- ◆ pHの改善が重要になる。現状pH5.5程度なのでpH6.0を目標に、毎年秋に苦土炭カル100～200kg/10a、春に防散炭カル100kg/10a施用している

今後の経営ビジョン

- ◆ たまねぎの面積を増やしたい！
- ◆ 根菜類の直播てんさいを導入し、輪作のスペンを広げ、土づくりを行いたい。
- ◆ 機械化できる野菜（にんにく等）、なたね、飼料用とうもろこしの導入を検討していきたい。



経営概要 (H29年: 10,813a)



作物	面積
水稲移植	2,297a
乾田直播	1,209a
秋まき小麦(大豆間作)	2,460a
春まき小麦	781a
大豆	4,066a

農事組合法人
セレスコーポレーションの概要

法人設立 平成27年

基本方針

- ・地域の絆を大切に!
- ・農業維持・発展に貢献!
- ・効率的な農業経営を目指す!

労働力

代表1人 構成員4人 従業員1人
臨時雇用のべ13人

作業の委託・受託内容

委託 防除(水稲移植・乾田直播・小麦)

労働時間の試算

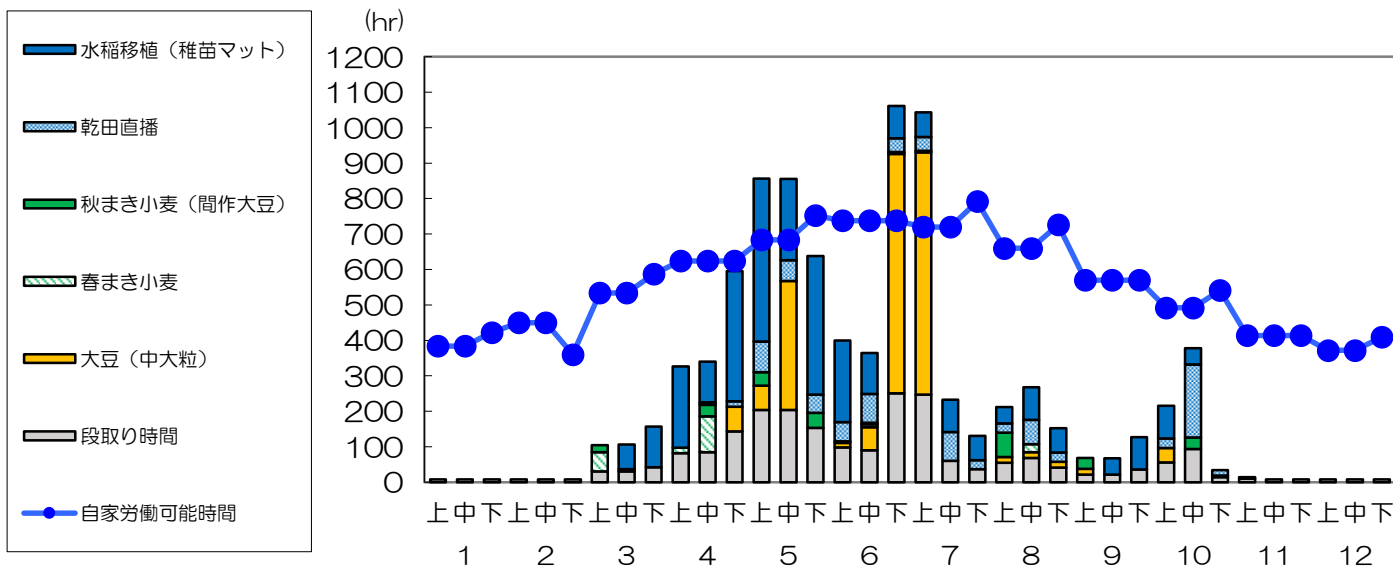
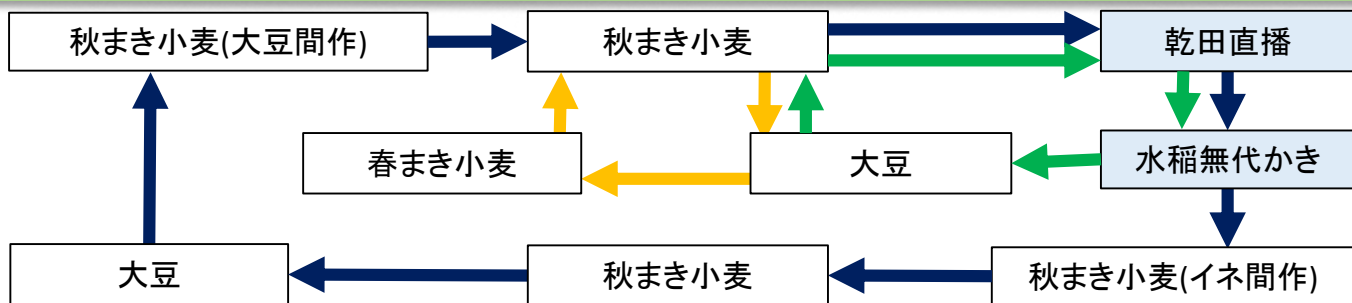


図55 農作期間の労働時間 注: 営農ナビ (岩見沢版) による試算 (雇用は含まない)

現在の輪作体系



輪作の考え方

- ◆ 作付面積割合は品目ごとに決めているわけではない。
- ◆ 水稲移植ほ場も輪作に取り入れ、連作は長くても2～3年としている。
- ◆ 小麦や大豆で雑草が増えてきたら水田に戻して対策している。

作業の効率化を目指して、団地毎に作物を割り振り、輪作を行っているよ（ブロックローテーション）。



輪作をはじめたきっかけ



- ◆ 水稲と小麦だけでは雑草対策ができなかったため、大豆を導入した。
- ◆ 一元化法人にしたことを機に、ブロックローテーションに取り組んでいる。

輪作を行っての感想・実感

< 実感した効果 >

- ◆ 小麦の収量は増加してきている。
- ◆ 乾田直播の導入により除草剤の選択が広がり、秋まき小麦を連作していた頃に比べスズメノカタビラを抑えられている。

< 輪作してみた際の注意点 >

- ◆ 地域的な大豆の面積増加や、ブロックローテーションで大豆ほ場が集まっている（団地栽培）ので、マメシンクイガの防除は徹底する必要がある。
- ◆ 近年は特に雨が多いため、水田から大豆にする際は排水対策を入念に行う必要がある。
- ◆ 新規作物の導入にあたっては、栽培技術を習得できるかが不安材料。また、設備投資をどの程度して良いのかをよく考える必要がある。

今後の経営ビジョン

- ◆ 法人化したことでまだ労働力に余裕があるため、200ha程度まで経営面積を増やしたい。
- ◆ 新規作物としてにんじん（生食用）、キャベツ（加工用）、子実用とうもろこし、直播たまねぎを模索している。